

この坂もおりて、
町で暮らそう

この特集は、この坂からはじまる。

毎朝、七時過ぎ、九〇人ほどの人が、
坂の下のバス停に向かった。

町で職場実習を終えて夕方に戻ってくる。

いつか、町で暮らすのだ、との思いを秘めながら、

半世紀ほど前、坂の上に、

北海道立の入所施設「太陽の園」がつくられた。

親亡き後も、一生安心して暮らせるように、

障害者四〇〇人が全道から集まってきた。

施設ではなく、施設のある伊達市そのものを

安心して暮らせる町にするために、

太陽の園の職員は動き出した。

まず働く場を見つけ、住まいを用意して、

いま、六〇〇人の障害者が町で暮らす。

その太陽の園のタネは、道内に飛び、

当麻町、当別町では過疎化に苦しむ町そのものを

救おうとしている。

障害者の居場所づくりから、

町自体の居場所づくりへ。

これからの福祉施設の役割が見えてくるはずだ。